慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『自然学』A巻における生成の問題 : 質料概念の形成をめぐって
Sub Title	The problem of change in Aristotle's physics, A : on the formation of the concept of matter
Author	千葉, 恵(Chiba, Kei)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1982
Jtitle	哲學 No.75 (1982. 12) ,p.19- 45
JaLC DOI	
Abstract	In the first book of Physics, which is said to belong to his early Academia period, Aristotle investigates the principles of change in general - matter, privation and form. The most important of his discoveries in that book is, it seems, the concept of matter analysed in terms of the underlying thing (substratum) of change; the thing underlying is the terminus a quo and the thing constituted is the terminus ad quem of change. The relation of both termini consists in the fact that matter is the proximate cause of the thing constituted, such as bronze becoming a statue and wood becoming a bed, so that an analogy is found in the relation between the matter qua terminus a quo and the thing constituted qua terminus ad quem as between bronze and statue, wood and bed, and so on. It follows that Aristotle devised at first the concept of matter in relation to the thing constituted, not in relation to the formal cause as seen in later writings, for matter is consistently. in Physics, A the proximate cause of the thing constituted, and not in such a way that prime matter is claimed to be the ultimate cause of all things as many commentators interpret the text.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000075-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『自然学』A 巻における生成の問題

——質料概念の形成をめぐって——

千　葉　　恵*

The Problem of *Change* in Aristotle's *Physics, A*

——On The Formation of The Concept of Matter——

Kei Chiba

In the first book of *Physics*, which is said to belong to his early Academia period, Aristotle investigates the principles of *change* in general — matter, privation and form. The most important of his discoveries in that book is, it seems, the concept of matter analysed in terms of the underlying thing (substratum) of *change;* the thing underlying is the *terminus a quo* and the thing constituted is the *terminus ad quem* of *change.* The relation of both *termini* consists in the fact that matter is the proximate cause of the thing constituted, such as bronze becoming a statue and wood becoming a bed, so that an analogy is found in the relation between the matter *qua terminus a quo* and the thing constituted *qua terminus ad quem* as between bronze and statue, wood and bed, and so on.

It follows that Aristotle devised at first the concept of matter in relation to the thing constituted, not in relation to the formal cause as seen in later writings, for matter is consistently in *Physics, A* the proximate cause of the thing constituted, and not in such a way that prime matter is claimed to be the ultimate cause of all things as many commentators interpret the text.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程

はじめに

『自然学』A巻は『諸原理について *περὶ ἀρχῶν*』という名で後世に伝えられた，アリストテレスのアカデメイア時代における，初期の独立した原理探求の講議草稿であると言われている[(1)]．原理は，原理それ自身にとって何ものかであることはなく，常に「或るものの（テイノス）」原理であるとアリストテレスは言う（*Phys*, A,2. 184a4-5）[(2)]．彼にとってこの或るものとは動的なものである．「我々は自然によって存在する事物を，その全てであれ，その或るものどもであれ，運動するものであるということを基本前提として立てておこう」(185a12-13)．現実世界に生成消滅，変化等何らかの動きが存在することは，我々の経験の根本的事実である（cf. 185a13-14)．この前提の下に，アリストテレスはA巻において，「生成する自然物の原理 *αἱ ἀρχαὶ τῶν περὶ γένεσιν φυσικῶν*」(191a3-4) とは何であり，いくつあるかを考察している．その探求方法は先行哲学者の生成に関する諸説の批判的吟味と，生成に関する言語使用の文法的論理的分析である[(3)]．これらの手続きを経て彼は三つの原理を提示しているが，先行者の難問（アポリア）や生成に伏在する諸問題を解決し，アリストテレスの独自の立場を鮮明にするものは，生成における基体 *ὑποκείμενον* の概念を媒介にしての質料 *ὕλη* の創案であると我々は解する[(4)]．そこで，本稿において，我々は生成の問題を論じながら，質料概念がいかなる機能を担うものとして，いかなる手続きによって創案されるに至ったかを考察することにする．我々は最初にアリストテレスが当時どのような問題状況に置かれ，どのような課題を担わされていたかを管見し，続いてA巻7章を中心に彼独自の原理論の展開を考察する．最後に我々は8,9章のパルメニデス，プラトン批判における，彼の原理論の自己検証について簡単にふれる．

1.

自然物が動的なものであるという先の基本前提には，すでに存在を唯一にして不動かつ永遠と考え，運動，多数性，非存在を虚妄とするエレア派への批判が含まれている．そもそもA巻の根底には一貫してパルメニデスの命題「すべて生成するものは必然的に，存在から生成するか，非存在から生成するかのどちらかである」(187a32-33, cf. 191a28-29) が存し，この両刀論法がアリストテレスの生成の原理に関する思考の方向を決定していると思われる．つまり自然物が生成することは経験上明らかだとしても，それが存在からの生成であるのか，非存在からの生成であるのかという哲学的問題が彼の原理探求の出発点ないし契機となっている．従って生成の問題は存在，非存在及び両者の関連の問題と重なり，パルメニデス，プラトンの問題意識がそのままアリストテレスに継承されることになる．アリストテレスがこの問題をめぐって，彼らの思想と対決することは独自の立場を築くために不可避な過程であったと言える．

A巻 2,3 章におけるエレア派批判は多岐にわたるが，アリストテレスは彼らの不条理な理論が「一つの不条理な前提」(185a10, 186a23-24) を許容することから導出されると解している．それ故に彼にとってはその前提の虚偽さえあらわにすれば，「存在(エオン)」は不生不滅，完全，不動，始終なきものという「巨大な鎖の束縛[5]」から彼自身を解放することができ，雑多にして動的な現象を救いうるわけである．アリストテレスにとってパルメニデスの前提における誤謬とは，存在が多くの意味を持つにも拘わらず，「存在はただ一つの意味を持つだけであると容認する」(186a24-25) ことを意味する．これは存在及び非存在に「あるはある」「あらぬはあらぬ」という同一性だけが成立するということである．このように存在，非存在を一義的なものとして解する限り，先の両刀論法のどちらも不可能であり，およそ生成消滅が否定されることになる (cf. 191b13-14)．すなわち

まず両刀論法の一方の角である「存在から」に関しては，存在はすでに存在するのだから，存在が「存在から」生成することはない．また他方の角「非存在から」も何ものも生成することはない．つまり「非存在」とは「非存在である限りの ἢ μὴ ὄν それ」(191b26) すなわち存在の絶対的否定を意味するものだから，それから何らかの存在の生成が導出されることはありえない．絶対の無は決して存在に関わることはないのである (cf. 191a27-33, 191b25-26)．アリストテレスは以上のことを分析した上で，存在，非存在をただ一つの意味を持つものとして容認する必要はないと主張する．「なぜなら「あらぬもの」は端的にあるわけではないにしても，〔「これこれのものではあらぬ」という意味では〕或るあらぬもの μὴ ὄν τι であることを妨げる何ものもないからである」(187a5-6) と彼は説明する．「あるもの」も同様であって，それでもって「或るあるもの ὄν τι」のことを理解する以外にないと彼は主張する (cf.187a8-9, 191a34-b2)．アリストテレスはパルメニデスの論理主義，絶対一元論からなる硬直した存在論を，それは彼が「一つの不条理な前提条件」を容認したことに基づく結果であると指摘し，存在は多くの仕方で語られるすなわち多くの意味を持つから，ὄν は実際には ὄν τι にすぎず，同様に μὴ ὄν も μὴ ὄν τι にすぎないと主張し雑多なる現象を救ったのである．(6)

ところで自然哲学者，エレア派，ピュタゴラス学派，プラトン学派等の先行哲学者は原理の数において，また生成の様式等において各々見解を異にしていたけれども，彼らのあいだに共通見解も見いだされる．(7) アリストテレスは5章において「彼らのすべてが反対物 τὰ ἐναντία を原理だとしている点では一致している」(189a19) と述べて，この共通な見解を検討し始める．例えばタレス，アナクシメネス，ヘラクレイトスは濃密と稀薄を，原子論者は充実体と空虚を，プラトンは大と小を原理として立てている．なおパルメニデスでさえも「現象事実にはいやでも従わざるをえなかったので」(8) 彼の哲学詩の後半において，真理の道に代わって，臆見の道を

宇宙論として語る時は，熱と冷の反対物を原理として立てている[9]．彼らは反対物が原理であるとすることの理由を明確に自覚していたわけでもなく，その提示も混乱した形であったにも拘わらず「真理そのものに強制されたかのように」(188a30) 皆例外なしに，この主張において一致しているとアリストテレスは述べる．

ところでアリストテレスによれば，反対物を原理とする見解の真理性は「論理の上でも ἐπὶ τοῦ λόγου」(188a30-31) 確認される．一般に生成は付帯的な意味を除外すれば，任意のものから任意のものが生起するという仕方で成立しないと彼は言う．例えば或る重さから或る長さが生成するとか，或る優しさから或る白が生成することはない．むしろ或る長さは或る短かさから或る白は或る黒から生成するのが本来的である．厳密に言えば，白いものが生成するのは白くないものからであるが，白くないものはその反対物の黒の他，中間段階のすべての色を含んでいるから，白は「黒から，ないし白と黒の中間物から生成する」(188a31-b1) と述べられる．このようにすべての生成消滅は一方の反対物ないし中間段階から，他方の反対物へ進行するという一般構造を持っている．

しかし省察を深めると，その構造においては反対物同士が相互に直接作用しあうことが起こらないことに人は気がつくだろう．アリストテレスはこの点を6章で追求する．例えばアナクシメネスはそのことに気付き，稀薄と濃密が反対物を受容するにふさわしい感覚的差異性の少ない空気という基体に作用して，事物を生成せしめると考えた．エンペドクレスも愛と憎の反対原理が球状の基体に作用すると考えた (189a22-26, 189b7)．というのも反対物の一方が他方の現前に際してそのまま留っていることが不可能である以上，作用するにも相手がなければ両者が直接に作用しあうことはありえないからである．例えば健康が病気と同時に両立することは不可能である．健康が現前している場面に病気が現前しえないとすれば，健康が病気に直接に作用を及ぼすことはありえないことになる．従ってそれ

が反対物のどちらでもありうるが故に，生成が反対物から反対物へとそこにおいて生起しうるところの第三のものがなければならないように思える．反対物のいずれかが「或る第三のものに働きかけて，この第三のものから〔反対の〕何ものかを」(189a24)生成せしめると考えることには相当な理由がある (cf.189b17-18)．以上から6章においてアリストテレスは反対物がそこにおいて作用する媒介的な基体としての第三の原理を立てなければならないという結論に達する(189b1)[10]．

2.

以上の予備的考察を踏まえた上で，A巻7章でアリストテレスは彼独自の生成の原理論を明確な形で展開することに進む．この目的のために彼が最初に駆使する武器は，もはや学説史的な分析批判ではなく πῶς δεῖ λέγειν "いかに語るべきか" という言語使用，言語表現の文法的論理的分析に関するロギコース λογικῶς な方法である[11]．

7章冒頭で彼は「まず生成一般についての問題から始めて，我々の見解を説いていこう．というのも共通な問題を最初に語って，それから個別に特殊な問題の考察に進むのが探求の自然な順序なのだから」(189b30-32)と語り，7章の内容を共通な問題と特殊な問題の二つに分割している．すなわちトマス・アクィナスやH.ハップが指摘するように，第一部189b30-190b17 で実体的生成，属性的生成，さらに人工物と自然物の生成をカバーする生成一般が論じられ，第二部190b17-191a22では第一部の議論をもとにして原理論へと探求が進められている[12]．

さて生成一般を論じるさいのアリストテレスの第一の主張点はこうである．「我々は或る事物から他の事物が生成し，或る種の事物から異なる種の事物が生成すると主張する．そしてこのことは単純体の場合にも，複合体の場合にも言われる」(189b32-34)[13]．ここで彼は生成が "から ἐκ" という表現の下に述べられることを指摘し，この ἐκ に原理探求の重要な機能

を担わすことを予示ないし暗示している．

まずアリストテレスの主張の中に見られる「単純体」と「複合体」とは，或る一つの事物，事態のどこに強調点を置いて述べるかによって異なるだけの言語表現上の区別を意味していると考えられる．例えば次の三つの言明は同一事態を表現している．①「人間が教養的になる」②「無教養が教養的になる」③「無教養な人間が教養的な人間になる」 (189b34-190a1)．ここで単純体というのは「人間」「無教養な」「教養的」であり，複合体というのは「無教養な人間」「教養的な人間」のことである．①②③は共に「人間」「教養的」「無教養な」の三項によって implicit に或いは explicit に構成され，或るものにおいて「教養的になる」という一つの事態を表現している．これらを砕いて表現すれば①は「あの人には教養が身につきましたね」ということであり，②は「〔あの人は〕無教養だったけれども教養が身につきましたね」ということであり，③は「あの無教養な人が教養ある人になりましたね」ということであり，何を強調したいかによって表現が代わるというだけのことであり，これらは交換可能な言明である．同一事態を表現する言明が幾つかあるとしても，実際に「生成するものはすべて複合的なものである」(190b11)．つまりたとえ或る項が explicit に表現されなくとも，上記三つの言明は教養の生成がそこにおいて生起する或る基体の存在することが必須であることを告げている．「もし人が我々が論じているような仕方で注意しさえすれば，生成のすべての事柄から，生成過程には常に何かがすなわち〔何かに〕生成するものがその基に措定されていなければならないということが理解できよう」(190a13-15)[14]．従って前章で示唆された事柄すなわち生成は一対の反対物と基体という三つの要素によって構成されるということがここで確認されたわけである．ところで上述の事例が実体的生成ではなくて属性的生成の事例であることに注意しておきたい．ここでは生成の三極構造のモデルとして，分析ないし理解に容易な属性的生成が取りあげられている．というのも次に述べるように

生成の問題には必ず持続の問題がからんでくるが，実体の生成消滅における持続の問題はより複雑で，理解により困難なものとして現われるからである．

さてどんな生成過程を通じてもそこに持続するものと持続しないものとがある．例えば或る人間が無教養から教養的になったとすれば「その〔生成の〕基で彼は人間として持続して依然として人間である」(190a10-11)．これに対して生成の始点である無教養は持続しない．さらに上記言明③における生成の始点「無教養な人間」という複合体も持続しない (190a12-13)．なぜなら教養のない人間が教養ある人間になれば，人間は依然として存在するけれども，教養のない人間はもはや存在しないからである．以上の事例において持続するものが第三の要素・基体であることは明らかである．

次にアリストテレスは生成表現を二つに分類している．一つは，今まで語られてきた「或るものが他の或るものになる」という，生成の終点が述語として表現される通常の述語的様式の生成表現である．他の一つは「或るものが他の或るものから (ἐκ) なる.」という表現である (190a5-6)．W. ヴィーラントに倣い前者を「述語的生成型」後者を「エク (ἐκ) 生成型」と呼ぶことにする.[15]

先に挙げられた三つの述語的生成型の言明の或るものはエク生成型によっても表現しうる．「無教養から教養的になる」.「無教養な人間から教養的な人間になる」．しかし「人間から教養的になる」とは言われずに，ただ「人間が教養的になる」と言われることは注意を要する (190a7-8)．つまり以上のことが意味する事態は，持続しないものが表現される場合には，それが単純体であれ複合体であれ，両表現型によって語られうるが，持続するものが表現される場合にはエク生成型は適用できないということである．従って述語的生成型が生成の全領域をカバーしうる普遍的な表現型であるのに対し，エク生成型は持続しないものにのみ適用される部分的なも

のであり，生成の始点の項が持続するか否かが両型の区別の規準となるように見える．

しかし他の事例を検討してみると，我々の言語使用はこの単純な分析を許さないことがわかる．「持続するものどもの場合にも，時としては同様に〔エク生成型で〕語られることもある．というのは例えば「青銅から像が生じる」とは言うが「青銅が像になる」とは言わないからである」(190a 24-26)．このように述語的成型に対応する表現がなに一つ不可能な生成のタイプも存在し，述語的生成型が生成全般を包摂しえないことがここで示されている．像の中に青銅が持続するのは事実である．このことはエク生成型によっても，或る場合には生成過程を通して持続する事物が表現されうるということを意味している．従って両型は生成の領域を相互に部分的に覆うものであって，一方が他方を包摂するような関係にないことが明らかにされた．それ故に 190a31 から始まる第一部後半の導入句として「生成は多くの仕方で語られる」(190a31) と述べられているわけである．我々はこれらの日常表現型の構造を概念的に構成しうる共通の観点を見い出さなければならないわけであるが，アリストテレスはさらに他の表現型があることを指摘し分析している．それは実体にのみ適用される「端的に生成する ἁπλῶς γίγνεσθαι」(190a32) という表現型である．この場合は生成の終点が主語として表現されるので，これを「主語的生成型」と呼ぶことにする．例えば生成が反対物から反対物へという過程を持つにしても，我々は「家でないものが家になる」とは言わずに，ただ「家が建つ＝家が生じる」とか「赤ん坊が生まれる＝赤ん坊が生じる」と語る．この事態は述語的生成型によって表わし得ないものとされている (190a32)．生成の始点を主語とする述語的生成型では実体の生成を表現することはできない．実体とは他の基体の述語となることのないものであるから，端的な生成の終点としての事物は述語的生成型の述語の位置にくることはできないのである (190a36-190b1)．従って我々が主語的生成型で端的な生成について語りう

るのは，いかなる属性的な規定も問題にならず，ただ「赤ん坊が生まれる」というような，生成してくるものだけが問題にされている場面においてのみである．

主語的生成型をこのようなものとして理解する時，余剰の属性的規定性を含まない事物の端的な生成は述語的生成型で表現されるものと領域上の相互排除的な関係にあることが知られよう．しかしながら，この型がエク生成型とも排除的な関係にあるとは主張されない．むしろアリストテレスはエク生成型が主語的生成型に対応しうると考えている「実体すなわちおよそ端的にあるものもまた，実は或る基体から生成することは観察する人にとっては明白になるであろう．というのも常に何ものかが基に措定されていて，生成するものはそれから生成するのであるから」(191b1-4)．確かに先述のように日常言語表現においては「人間から教養的になる」等と語られることはない．けれどもこの種の表現を日常言語表現の背後にあるものに至るまで分析する時，単純体の生成は属性的生成においても，実体の端的な生成においてもありえず，implicit なものを explicit にすれば，常に複合体に分析可能な事態を呈するのである．それ故に「人間が教養的になる」とは「無教養な人間が教養的になる」ことであり，「無教養な人間から教養的な人間になる」(cf. 190a29-31) ことであって，必要な変更を加えればエク生成型によっても「人間が教養的になる」ことを表現しうるのである．というよりも日常言語の背後においては，それはエク生成型に服しているのである．また通常，生成の終点のみを表現する主語的生成型も実は論理的分析を加えれば，エク生成型に服することをアリストテレスはこの箇所で述べている．例えば「植物や動物は種子から生成する」(190b 4-5) のである．「赤ん坊が生まれる」という日常言語表現も，それに分析を加える時，「赤ん坊は種子から生まれる」という構造を日常言語の背後に有している．かくして事物は常に生成の始点である“基体から ἐξ ὑποκειμένου”生成するということが解明された．

アリストテレスはそこで端的な生成のいくつかの様式を例と共に枚挙し，それらが基体からの生成であることを確認している．a. 形態変異による生成．例えば青銅から像が生成する．b. 付加による生成．例えば多くの流れから川が増大生成する[16]．c. 除去による生成．例えば石材からヘルメスが制作される．d. 合成による生成．例えば煉瓦や木材によって家が建築される．e. 変質による生成．例えばワインが発酵する時に生ずる酢のように素材[17]の側に変化が起こる (190b5-9)．

アリストテレスが端的な生成の例として以上挙げるものには明らかに問題がある．つまりそれらは注意して見れば事実上属性的生成以上のものではない．それにも拘わらず，彼がなぜそれらも実体にのみ適用されるはずの端的な生成と同一視するかのように陥いったかという問題である．この問いは実体の生成と属性の生成を区別する指標の何であるかを問うことに他ならない．ヴィーラントは同じ事態が或る観点からすれば性質変化であり，他の観点からすれば端的な生成であるという観点の相違によってこの難問の解決をはかっている[18]．しかし異なる観点の区別基準が示されていない以上，それは安易な解決案であり説得力に乏しい．H. ヴァーグナーはこの箇所をひとつの古臭い言い廻し (Archaismus) と見做す[19]．つまり後にアリストテレスが『生成消滅論』A,2.317a17ff で，生成を結合と分離の形態に閉じ込めようとする先行哲学者に対して行なう批判と同じものがこの箇所にも原則的に妥当するというのである．すなわち b. の付加，c. の除去，d. の合成は結合 *σύγκρισις* と分離 *διάκρισις* とそれほどへだたったものではなく，ここに提示されているものはデモクリトス等の原子論者やエンペドクレス等の分離論者 (cf. 187a20-26) の影響化にある生成論にすぎないとヴァーグナーは主張する．G. モローも類似の見解を表明している[20]．彼は実体的生成と属性的生成の区別はプラトンの『ティマイオス』においてまだ明確でなく，アリストテレスにおいてもこの区別を成就したのは『生成消滅論』と『天体論』においてであるという見解を持っている．モ

ローはいくつかのテキストを引用し，それを典拠にして「アリストテレスが或る箇所で根本的なものと見做すこの区別を，時として無視することがあるのは驚くにあたらない[21]」と述べている．彼はここの箇所を「端的な生成は性質変化によって起こりうる」という区別無視の例と見て次のように解釈している．これは『自然学』E巻で生成消滅を性質変化等の運動から区別する以前のアリストテレスの初期の見解である．その当時彼はまだすべての変化を無差別的に取りあげ，それらを『自然学』A巻で展開される原理論によって認知される基体の属性変化と見做していたというのである．

我々は，アリストテレスはこの初期の段階では実体と属性の生成様式を区別する指標をまだ確立していないと考える点では，ヴァーグナーやモローに反対しない．しかしながらD．ボストックが「この節は確かに概念のアプリオリな分析ではなくて，諸々のケースの経験的な集収である[22]」と指摘しているように，たとえアリストテレスが実体と属性の生成様式の区別の指標を確立していなかったとしても，経験的に「観察する人にとっては *ἐπισκοποῦντι*」(190b3) 二つの生成の区別は明瞭であって，両者を混同することはないと彼は考えていたと思われる (cf.190b1-3)．例えば人間が白くなることを見て新しい実体が生成したと考える人はいないであろう．このような経験的判別の背後に働いているのは範疇区分の認識である．アリストテレスが「生成する」というにも多くの仕方があると語る時，彼は他のものの述語にならない実体と，実体の述語になる分量，性質，関係等の属性の区別に基づいてそのことを語っている(189a31-189b1)．範疇区分を得ている者にとっては，人間が白くなる事態がどの範疇に属する生成であるかは自明に識別されよう．従って事実上属性的生成のケースにすぎない上述の例は「実体すなわちおよそ端的にあるものもまた或る基体から生成する」(190b1-2) ことのたんなる例証 illustration にすぎないと考えるべきであろう (cf. 190b9-10)．彼の例証の手法—とくに青銅の像，家などといった例証—は彼の著作中随所に見い出される．もしアリストテレスが「自

然によってあるもの」の生成を論じる『自然学』で人工物の生成を端的な生成の事例として提示したのであったら，それはあまりに不整合だと言わなければならないだろう．

最後に第一部の結論としてアリストテレスは，生成物はすべて常に複合的であり，それは生成の始点と終点に分けられ，始点はさらに基体と否定的な反対物に分けられると述べて，生成の三極構造を確認する(190b9-17)．ところで第一部において二つの問題が残されているのを我々は見い出す．一つは持続の問題である．属性的生成の場合は基体が持続することは明白であり，そこに問題はないが，「植物は種子から生成する」というような実体の生成の場合には，生成の始点である基体＝種子と終点である植物の間に本質上の持続性は存在しないように見える困難を呈している．もう一つには生成の始点における否定的接頭辞 ἀ- で述べられる ἀσχημοσύνη 無形，ἀμορφία 無形相，ἀταξία 無秩序などの反対物と基体との関係の問題である(190b13-17)．二つの問題はともに基体をいかなるものとして理解するかに関わり，基体のさらなる解明を必要とする．第二部の原理論の展開へ進むことによってこれらの問題は解決されることになる．

3.

アリストテレスは第一部で，言語使用を手掛りにして生成の構造の分析を試みたが，190b17 以降の第二部においてその成果を踏まえ，原理論を展開する．

最初に彼は，運動をその本質的特徴とする自然物は個物としての実体であり，それの存在と生成の原理が存在することを確認したうえで，すべて自然物の存在と生成は基体と形相に基礎づけられると言う．「すべての事物は基体と形相から生成する」(190b20)[23]．この主張はこれまでの論述と二つの点で異なっている．第一にこれまでは反対物と表現されていたものが初めて形相 εἶδος, μορφή という原理として登場したことである．しかし

形相に関する論述は極めて簡単なものにとどまり，形相が一つの原理である (191a13) と述べられ，秩序と教養が例に挙げられているだけである (190b28-29)．第二に「から ἐκ」の用法が観点を異にして使用されていることである．従来は生成の始点についてこの語が使用されていたにも拘わらず，それはここで生成の終りに出現する形相にも使用されている．このことは「教養的人間は或る意味で人間と教養から合成されている」(190b 20-22) という例文の「或る意味で」という限定からも推測できる．この限定は「存在する自然物の存在構造から，生成する自然物の生成構造を推理する[24]」限りにおいて，ということを意味する．これは自然物の原理は生成の原理であると同時に存在の原理でもあるという理解に立つが故のことである (190b18-19)．生成原理の探求が存在事物の原理探求に他ならないとすることは，いわば生成の終点から始点を観察するという視点の転換の告知である．生成し終えて存在事物となったものを分析する時，それが形相と基体から構成されていることが判明する．事物が存在するのは原理によってである以上，その成り立ちは原理なる形相からであるとも言わねばならないのである (cf. 184a10-12)．

続いてアリストテレスは基体を二つに分類する．「基体は数において一つであるが，形相においては二つである．すなわち一方，人間や黄金そして一般的に言えば質料は数えられうるもの ἀριθμητή である．というのもそれらはほとんど「或るこれ」であるからであり，そして生成するものはそれから付帯的な仕方においてでなく生成するからである．他方，欠如態つまり反対性は〔基体としては〕付帯的なものである」(190b23-27)．基体はこの一節において原理論へと吸収され，質料 ὕλη と欠如態 στέρησις と呼ばれる二つの原理として提出されるに至る．

ところでこの注目すべき箇所は難解であって解釈が様々に分かれている．諸家の翻訳は各々ニュアンスの違いがあり様々であるが，我々の読み方と最も異なるのはヴァーグナーの読み方である．ヴァーグナーは D. ロ

スのテキストを読みかえて，ἀριθμητή の後のセミコロンと b26 の γὰρ を H. ボーニッツに賛成して除去し，次のように訳している．「というのも，人間と黄金，そして一般に“規定された質料 ὕλη ἀριθμητή das bestimmte Materialstück”はいっそう一定本質をそなえた事物に近いからである」[25]．ヴァーグナーは読みかえの理由を幾つか挙げているが，主な主張は以下の通りである．「人間と黄金の述語としての ἀριθμητή はトリヴィアルかつ余計であり，ὅλως ἡ ὕλη の述語としてのそれは危険な誇張であるから，それは ὅλως ἡ ὕλη を規定する付加語でなければならない．ὅλως ἡ ὕλη ἀριθμητή についてのみ或る意味で τόδε τι なる性格が主張されるのである」[26]．ハップは全面的にこの読みに賛成し「従来のこの箇所の説明のうち最も妥当な説明である」[27]と述べている．要するにヴァーグナーは ὕλη を τόδε τι と解することにアリストテレスの ὕλη 理論崩壊の危惧を抱いて，テキストを読みかえたわけである[28]．しかしこの危惧はアリストテレスの質料に関する次のような論述をも彼らをして曲解せしめることになるだろう．「基体としての実在 ἡ ὑποκείμενη φύσις は類比によって κατ' ἀναλογίαν 認識される．というのは，例えば像に対して青銅が，寝台に対して木材が，或る形相を所持するものに対してまだ形相取得以前の無形のものが有するような類比関係を，基体としての実在は実体(ウーシア)，或るこれ(トデティ)，ないし存在(オン)に対して有するからである」(191a7-12)．

ヴァーグナーやハップはここに基体概念の深化 Vertiefung と拡張化 Erweiterung なるものを考える．ヴァーグナーは次のように述べている．「青銅はまだ像ではない．基体としての実在は総じてまだ無であり，いかなる存在事物でもない．青銅は像にとって単なる一つの契機である．基体としての実在は実体一般にとって単なる一つの契機である．では基体としての実在とは一体何であるのか．それは ὕλη である．しかし単に青銅片が ὕλη であるような，そのような ὕλη ではない．それは端的な ὕλη：第一質料〔根源的質料〕である．アリストテレスはこのように関係の類比を手段に

して，規定された質料の概念を超えて根源的質料にまで至っている[29]」．ハップも類似な意見を持ち，アリストテレスがここで類比の助けをかりて“規定された質料 ὕλη ἀριθμητή”から「全生成の最下の基体である第一質料をもその下に包摂しうる[30]」質料一般を推論していると解している[31]．かくてハップによれば，アリストテレスは7章で次のような三段階の論点の移行を介して質料の概念に到達したことになる．「1．基体＝実体⟶2．基体＝規定された質料 ὕλη ἀριθμητή⟶3．基体＝質料一般[32]」．かのアリストテレスの一節に第一質料を読みとる者には，他にシンプリキウス，トマス・アクィナス，C.ボイムカー，A.マンシオン，J.オーエンズ，岩田靖男等が挙げられよう[33]．アリストテレスが彼の全著作活動を通じて第一質料を信じていたか否かを知ることは我々の論稿の射程外にある[34]．ここで我々のなすべきことは先に挙げられた質料提示に関するアリストテレスの二つの箇所について，とくにテキストの読みかえを必要としない我々の見解を提出することである．

7章第一部の生成における基体の分析を通じて，アリストテレスにおいてほぼ基体を質料と同定する機は熟していたと言える．彼の独創性は，後述するようにプラトンの説と対比させる時にとりわけ際立って見られるように，基体を数において一つとし，形相において二分したことにある(190 b23-24)．第一部において，生成は基体と一対の反対物という三極構造の下に把握されていた．その際生成の始点における基体と否定的反対物の関係がいかなるものであるかという問題が残されたのであった．アリストテレスはかの第一の箇所 (190b23-27) において，否定的反対物を，自体的には非存在であるところの欠如態 (192a5) として基体に吸収することによって解決を計っていると言えよう．つまり彼は基体を表明すること自体のうちに，欠如態を表現しているそのような基体——言うなれば欠如的基体を——“質料 ὕλη”と呼んだのである．その限り基体は「数において一つ」と語られる．ここに形相と欠如的基体としての質料が相関的なものとさ

れ，形相と質料という彼の基本的な二極構造の形而上学的素地が形成されたと言えよう．ただしここ『自然学』A巻においては，まだ原理が二つであるか三つであるかの問題はアンビバレントのまま留保されている (190b 29-191a3)．「原理を二つとするか三つとするかの問題は，人が他の原理〔＝形相〕の否定によって規定されるだけのものを独立的な原理としてどの程度に認めることができるかという問いに帰着する[35]」とヴィーラントは述べている．いずれにせよアリストテレスは基体をたんに事物として見ず，生成の終点なる事物という観点から，その当の事物の形相を欠如している関係物として見ている．さらに後の著作において，現実態と可能態の二極の概念図式がこの見方に付加適用される時点においては，欠如態の概念は姿を消してしまうことになる．

質料が「或るこれ」とは言えないが，「ほとんど或るこれである *τόδε τι μᾶλλον*」と言われるのはただそれが欠くところの形相を取得せんとする質料の状態を表明している．また例挙されているもののうち，「人間」は 190a13-21 の述語的生成型の分析における基体のモデルであり，「黄金」は青銅や石材 (190b16) と同じく主語的生成型の分析における基体のモデルである．我々は諸家が問題にするほどには人間が質料とされることに当惑を感じない．というのも我々は，生成の終点たる事物との相関関係にある始点の位置を占める欠如的基体—属性の基体であれ，実体の基体であれ—をアリストテレスは“質料”と呼んでいると解するからである．

次に「生成するものはそれ〔＝質料〕から付帯的な仕方においてではなく生成する」(190b26-27) と語る彼の意図を考えてみる．質料から生成するのは，このオリーブの木であってあの樫の木ではなく，この人間であってあの馬ではないというように (cf. B, 4.196a31-33)，生成の近接原因である質料から一定の本質を持った事物が生成することは決して付帯的事態でなく自体的事態であると言うべきであろう．従って我々はヴァーグナーが解するように“規定された質料 *ὕλη ἀριθμητή*”ではなく，“数えられうる

ἀριθμητή という特性を持つが故に" 質料は自体的生成を可能ならしめる近接原因たりうると解する.

次に「欠如態つまり反対性は〔基体としては〕付帯的なものである」(190b 27) という陳述が続く. 無形 ἀσχημοσύνη 無形相 ἀμορφία 等の語が表わすように, 欠如態は常に否定的接頭辞 ἀ- で始まり形相の否定を表現する「論理的概念」[36]である. 欠如態は生成の結果の否定によってのみ表現されうるものにすぎず, 基体の積極的構成要素ではありえない. しかしこれが同時に基体でもあるのは, それが或る意味で生成の始点であるからである. 例えばすでに見たように教養は無教養から生成し, 秩序は無秩序から生成する. しかしこのような欠如態からの生成表現は言語上, 論理上よりいっそう明晰ではあっても, 実際上は質料からの生成と比べるならば付帯的な表現であると言わねばならないだろう. しかしながらアリストテレスが非存在である欠如態を基体のうちに導入したことは, 後に述べるようにパルメニデス, プラトンが逢着した難問を解決するために必要なことであったのである.

ところでA巻9章に現われる質料の定義は質料を τόδε τι に近いものつまり近接質料と解する我々の解釈に確証を与えると思われる.「私が質料と言うのは, 各々の事物が〔第一に〕そこから付帯的にではなしに生成し, しかもそれ自らはこうして生成した各々の事物の第一の基体のことである」(192a31-32). この定義は生成過程の無限の遡源を否定する議論の文脈の中にある(192a25-34 cf. *Metaph.* Λ, 3. 1069b35-1070a4). その議論は遡源を停止せしめるものが, 或る生成事物の「可能態として」(192a27) 見られる限りの質料に他ならないことを主張している. もし基体を或る事物の可能態として見ずに, 当の事物がそこから生じる他の事物として見るならば, それについてまたそれの生成を語らねばならず, そのことは無限に進行するでもあろう. つまり可能態としての質料はそれについては生成消滅を語ることのできないものとして, 予め措定されているものすなわち基

体のことなのである．従って質料はそこから生成が付帯的にでなく自体的に起こるところの第一のすなわち最近の基体である[37]．以上のようにアリストテレスは『自然学』A巻を書く時点では質料を生成の始点としての基体という観点から形成しているのである．

さて以上のように質料を解する時，質料に関する第二の陳述箇所:「基体としての実在は類比によって認識される．というのは，例えば像に対して青銅が，寝台に対して木材が，或る形相を所持するものに対してまだ形相取得以前の無形のものが有するような類比関係を，基体としての実在は実体，或るこれ，ないし存在に対して有するからである」(191a7-12)は，多くの人々が解するように第一質料の推論ではなく，文字通りに質料の認識方法を彼が提示したものと解すべきことは明らかであろう．この類比を定式化すればA：B＝C：Dとなり，AとBの関係とCとDの関係が類似であることが示される．まず比例式の右項の実体 *οὐσία*,或るこれ *τὸ τόδε τι*, 存在 *τὸ ὄν* は『自然学』A巻においては同義に扱われ，個的な事物を意味し，像や寝台から類比的に引き出された一般名辞として生成の終点を表わしている．左項の基体としての実在は質料を意味し，青銅や木材等から類比的に引き出された一般名辞として生成の始点を表わしている．ところで像に対する青銅，寝台に対する木材等の関係に共通する特性として把握されるものは，左項のものが右項のものの近接的原因となっていることである[38]．そこから人は右項の実体を視座に据え，近接的原因という関係性によって左項の質料なるものを推理することができるのである．このように生成の終点と始点という観点から類比的認識が考えられているが故に，明らかにそこに提示されているのは質料と形相との関係ではなく，質料と生成事物の関係である．このことはアリストテレスによって質料概念が，生成の終点に対する始点なる基体という意味で把えられていることを意味する．従って我々はアリストテレスにおいてはじめから質料が形相との相関的原理概念として創案されたのではないと考える．質料はその成り立ちを

生成の分析に持つのである.

『自然学』A巻においては，アリストテレスの質料概念は形成途上にあり，この事実を無視してその後に据えられた質料に関する諸見解をA巻のテキストの中に読み込むことに諸家の誤りがあると思われる．A巻の時点においては，質料は「知覚されぬ」(*De gen.* B,5.332a35-b1)ものでも，「存在事物を規定するいかなる述語を欠くもの」(*Metaph.* Z, 3.1029a20-21)でもなく，「或る意味ではほとんど実体ですらある *τὴν ἐγγὺς καὶ οὐσίαν πως*」(192a6)もののことである.「完全な無形相と不定性がアリストテレスの質料の最初の概念であることを必要としない[39]」とソルムセンは述べている.

4.

アリストテレスは以上明らかにされたような指標を持つ，質料と欠如態という二義を備える基体としての実在を7章で発見したが故に，独自の立場を築きえ，「先達の難問はこのようにしてのみ解決される」(191a23-24)と8章の冒頭で自信を持って語り，「もしあの実在が彼らの目にとまっていたら，彼らはあらゆる無知から解放されていたであろう」(191b33-34)と8章の終りで語ることになる．残る8，9章はかの実在概念によって，残されている問題とパルメニデス，プラトンの思想に伏在する難問を解くことに当てられている.

先ず残されている問題とは生成における持続の問題である．この問題は7章第一部の生成一般についての論述で簡単に扱われた後放置されていたのであるが，9章で次のように結論される.「けだし〔生成過程を通じて〕持続する質料 (*ἡ ὑπομένουσα*) は生成物にとって形相に伴う協同原因であり，いわばそれらの母である」(192a13-14).またすでに見た様に質料の定義の中で彼は「それ自らはこうして生成した各々の事物に内在する *ἐνυπάρχειν* ところの，各々の事物の第一の基体」(192a31-32) として質料を語って，持続的性格を結局質料に担わせる．アリストテレスにとって質料が持続を

保つ理由は，形相付与によって生成したどんな事物のあるところにも必ず質料がその形相に伴い当の生成物の基体として依然としてそれに内在しているからである．ところで後に可能態と現実態の対概念が得られると，持続の問題は専らこの概念の助けを借りることになる．例えば「事物の最近の質料とその形相とは，前者は可能的に後者は現実的に同一である」(*Metaph.* H, 6.1045b17-19) と述べられるようになるのである．

次にパルメニデスに伏在する問題に関しては，すでに見たように2，3章でパルメニデスの存在概念の一義性は批判されたが，ここ8章では欠如態としての原理が取りあげられ，この原理によって「非存在からの生成」ということが表現可能であることが論じられる．「我々は……付帯的な仕方においては非存在からも何ものかが生成すると主張する．なぜなら欠如態はそれ自体では非存在だが，こうした非存在からこの欠如態が内在することのない何ものかが生成するからである」(191b13-16)．すでに見たように欠如態は質料と共に生成の始点である基体を構成するものであった．質料は生成過程を通じて持続し，生成した事物に内在するが，欠如態は生成の始点を非存在でもって顕示するだけであり，生成した事物には内在しない．こうして非存在から事物が生成するということは基体の欠如的側面を考慮する時，表現可能となる．

続く9章におけるアリストテレスのプラトン批判は『ティマイオス』を想起せしめる表現が縦横に駆使されている．アリストテレスによればプラトン及びその派の人々は基体としての実在に触れてはおり，「何か或る実在が生成過程の基になければならないとするところまで考え及んでいた」(192a9-10) けれども，「その実在を一つであるとみなした」(190a10-11) 点で充分に把えきっていなかったのである．彼らは『ティマイオス』における場(コーラー)や不文の教説『善について』における大と小の概念において非存在と質料を同一視していたとアリストテレスは言う (192a6-7. cf. *Δ*, 2.209 b11-16)[40]．「プラトン主義者たちの誤りは彼らがかのそれ自身としての非存

在と質料の間にいかなる概念上の区別を設定することなく，むしろ非存在それ自身を質料に帰しているところにある[41]」とボイムカーが指摘するように，彼らは質料の把握を誤り，また欠如態を見落としたと批判される(192 a12).

以上のプラトン主義者の誤りは彼らの善の価値論をも崩壊させることになるとアリストテレスは言う．生成論を価値論と重ねあわせて考えてみるならば，そもそも質料は生成において“母”のごとくに肯定的に働き，その本性上神的なものや善を追求する．他方欠如態は神的なものや善とするどく対立し，悪をひき起こすものである．しかるにもし人がプラトン主義者のように，この二つの傾向を二つの原理にわけずに一つの実在としての質料に帰するなら，質料は神的なものや善を追求すると同時に自分自身の破滅を追求するという矛盾した事態に陥いることになろう (192a14ff).

アリストテレスは以上のように，質料原理と欠如態原理の形成によって生成に関する先行思想の諸難問を解決したと思われる．

む　す　び

我々は本稿の結論として次のように言うことができるであろう．アリストテレスは『自然学』A巻において，生成について「いかに語るべきか」の問題から出発し，すべての生成が始点としての基体から生起することをつきとめ，最後に基体の分析から質料と欠如態の二原理を導出している．我々はここにアリストテレスにおける質料概念の形成過程を看取することができる．従ってアリストテレスにおける質料概念の成り立ちを考えると，質料は所謂質料形相論 (Hylemorphismus) における形相との相関概念として初めから立てられたのではなかろうと我々は考える．当初の段階においては質料はあくまで生成の基体として，事物の近接的な生成原理であって，“第一質料”をここに読み込むことは不可能である．むしろアリストテレスは“基体としての実在”の発見を似って，彼の形而上学的思考

様式である質料形相論へ至る道を開くことができたと結論したい.

註

(1) cf. I. Düring, *Aristoteles Darstellung und Interpretation seines Denkens;* Heidelberg, 1966, S. 189f. D. Ross, *Aristotle's Physics;* Oxford, (1936), 1966, pp. 3-7.

(2) 『自然学』A巻からの引用はベッカー版数字のみ記す. 同書他の巻からの引用は巻と章を付す. 著作の表記は慣例に従う.

(3) cf. C. Bäumker, *Das Problem der Materie in der Griechischen Philosophie;* Frankfurt/M, (1890), 1963, S. 216f. W. Wieland, *Die aristotelische Physik;* Göttingen, 1970, S. 139.

(4) 『自然学』A巻より少し後の作品と考えられる『形而上学』*Λ* 巻の生成論において, アリストテレスは質料を他の二つの原理より「いっそう主要な原理 *ἀρχὴ κυριωτέρα*」と呼んでいる (*Metaph. Λ*, 10. 1075b19).

(5) H. Diels - W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker;* Dublin/Zürich, (1912), 1963, Vol. I, 28, B8, S.235f

(6) H. ハップは「すべての生成と多数性を排除するエレアの"絶対的存在"—"絶対的非存在"の強固なアンチテーゼを, アリストテレスは"絶対的"非存在と"相対的"非存在(*ἁπλῶς—κατὰ συμβεβηκός*) の区別によって克服を試みた」と述べている. H. Happ, *Das Hyle Studien zum aristotelischen Materie-Begriff*; Berlin, 1971, S. 293.

(7) 自然哲学者たちの共通見解の一つとして「あらぬものからは何ものも生成しない」(187a27-29) という見解がある. O. ギゴンが「このような命題はパルメニデスの後になってはじめて形成されうるものである」と指摘しているが, このことからもアリストテレスが常にパルメニデスの思考様式を意識して生成論に取り組んでいることが伺われよう. O. Gigon, Die *ἀρχαι* der Vorsokratiker bei Theophrast und Aristoteles; in *Naturphilosophie bei Aristoteles und Theophrast*; Heidelberg, 1969, S. 113. (以後この論文集を *N. A. T.* と略記する).

(8) *Metaph.* A, 5. 986b31.

(9) D. Ross, *op. cit*, p. 487.

(10) H. チャーニスは, アリストテレスがここで到達した, 一対の反対物と基体という三つの原理は, プラトンの『パイドン』(102b-103c) に由来すると主張している.「この箇所 (102b-103c) で, イデアを分有する基体とイデアそ

のものの区別は次のことを示すことにある．すなわち基体は反対性質の一方の内属と他方の退去によって，一方から他方へと変化しうるけれども，イデア自身は，それ自身以外の他のものになりえないから，反対のイデアを前にすると退却しなければならない．プラトンは繰り返して次の事を強く指摘している．ひとつの反対物それ自身がそれの反対物になることは出来ないので，この意味においては反対物同士の相互の生成は不可能であるのに対し，反対物が反対物から生起するのは，ひとつのイデアを分有する基体が，今度はその反対物を分有しうるという意味においてである (103a-c).……ここに明らかにアリストテレスの基体，形相そして欠如態の思想の起源がある[(a)]」.

この見解に対し F. ソルムセンはここにアリストテレスの三極原理論の萌芽があることに疑問はないとしながらも「概して，プラトンの思想の初期の段階を反映した対話篇の研究よりも，アカデメイアにおける当時の議論がアリストテレスをより一層鼓吹したと考える方が道理にあう」と語っている．また「真の問題は『パイドン』の記述がプラトンの生成の現象に関しての最後の言葉ではないことである」として，彼はもはや反対物をめぐる議論によって生成を語ることをしない『ティマイオス』との関係に問題の所在を見ている[(b)]．我々はここで早急な断定を避けなければならないが，『パイドン』のこの記述なしには，先行哲学者たちの見解を上述のように整理することは容易ではなかったように思える．けれども，アリストテレスはイデア分有の思想を継承しないのであるから，原理の三極構造を受容したとしても，原理が何であるかを把握するには独創性が不可欠であることにはかわりはない．いずれにせよ「アリストテレスは学説史家ではなく，完全で究極的な哲学を構築することを求める哲学者である[(c)]」から，先行哲学者の思想，プラトンの著作と教え，そしてアカデメイアにおける討論すべてが，自己薬籠中のものとされ，独自の原理論展開の基礎資料とされたことであろう．(a). H. Cherniss, *Aristotle's Criticism of Plato and the Academy;* New York, (1944), 1972, pp. 90-91. (b). F. Solmsen, *Aristotle's System of the Physical World;* New York, 1960, pp. 83-84. (c). H. Cherniss, *Aristotle's Criticism of Presocratic Philosophy;* New York, (1935), 1976, p. 347.

(11) λογικῶς（言語形式的）という探求方法は φυσικῶς（自然的）な方法と対比的かつ相補的に機能し，πῶς ἔχει "事柄がいかにあるか" の把握へと人を導くものである．cf. *Metaph.* Z, 4. 1029b613, 1030a27-28. J. M. Le Blond, *Logique et Méthode chez Aristote;* Paris, (1939), 1973, pp. 203-221. J. L. Ackrill, *Aristotle The Philosopher:* Oxford, 1981, p. 27.

(12) Thomas Aquinas, *In octo libros physicorum Aristotelis expositio;* Marietti 1954, p. 53. H. Happ, *op. cit.* S. 283.

(13) 189b32-33: ἐξ ἄλλου ἄλλο καὶ ἐξ ἑτέρου ἕτερον に関して，ロスは ἄλλο が数における違いを，ἕτερον は性質における違いを指示すると解する．トマスも同様で，前者が実体存在を後者が属性存在を指示すると解する.D. Ross, *op. cit*, p. 491. T. Aquinas, *op. cit*, p. 53.

(14) 190a14: ἐάν τις ἐπιβλέψῃ ὥσπερ λέγομεν をヴィーラントは前掲書116ページで「もし人が"我々はいかに語るか Wie Wir sprechen" を注意しさえするならば」と訳している．これは原理探求における言語使用の果す役割りの重要性をテキストに読み込む意図によるものであるが，H. ヴァーグナーやW. ブレッカーが指摘するように誤訳である．ブレッカーはアリストテレスの言語に対する態度を次のような比喩で説明している．「アリストテレスは，あたかも法律学者が，それに関して註解を書くところの法律に対するようにではなく，むしろ裁判官が証人に対して，彼が知っていることを探り出すべく尋問するように，言語に対して関わっている」. H. Wagner, *Physik vorlesung; Aristoteles Werke*, B. II; Darmstadt, 1967, S. 340,347. W. Bröcker, *Aristoteles;* Frankfurt/M, (1964), 1974, S. 249.

(15) W. Wieland, *op. cit*, S. 114.

(16) T. Aquinas, *op. cit*, p. 54,

(17) 我々が"素材"と訳した原語は ὕλη である．原理論展開以前に ὕλη が使用されることに諸家は当惑している．R.P. ハーディーは「アリストテレスは質料 (ὕλη) 概念を築きあげるのに慎重であるから，κατὰ τὴν ὕλην という語句はうっかり使用されているか，または τρεπόμενα を説明するための後世の付加である」と解している．ロスもハーディーのこの箇所を引用して「恐らく欄外註」と述べている．我々は，ὕλη の語源が木材 ξύλον とか材料を意味するものであるから，この ὕλη を原理の術語とはとらずに，その通常の意味に解する．R. P. Hardie-R. K. Geye, *Physica; The Works of Aristotle*, Vol. II; Oxford, 1953, ad. loco, n. 2. D. Ross, *op. cit*, p. 493. cf. A. Mansion, *Introduction à la Physique Aristotelicienne;* Paris, 1946, p. 74, n. 65.

(18) W. Wieland, *op. cit*, S. 126.

(19) H. Wagner, *op. cit*, S.428.

(20) G.R.Morrow, Qualitative Change in Aristotle's *Physics;* in *N.A.T.* p. 156.

(21) G. R. Morrow. *op. cit*, p. 160f

(22) D. Bostock, Aristotle on the principles of change in *Physics I;* in *Language and Logos;* Cambridge, 1982, p. 185.

(23) 我々が"形相"と訳した原語は *μορφή* である. cf. Simplicius, *In Aristotelis physicorum libros qvattuor priores Commentaria;* (ed, H.Diels) Berlin, 1882, p. 215.

(24) H. Wagner, *op. cit*, S. 429.

(25) H. Wagner, Einige schwierige Partien aus der aristotelischen Physikvorlesung; in *N. A. T.* S. 286.

(26) H. Wagner, *op. cit*, S. 287.

(27) H. Happ, *op. cit*, S. 286, Anm. 31.

(28) ヴァーグナーは次のようにその危惧を表明している.「*ὕλη* が(いかなる程度においであれ) *τόδε τι* として語られうる, と考えるためには, 我々はアリストテレスの全体的な質料理論を忘れる必要があるだろう」. H. Wagner, Einige schwierigen *Partien;* S. 287.

(29) H. Wagner, *Physikvorlesung;* S. 435.

(30) H. Happ, *op. cit*, S. 287.

(31) H. Happ, *op. cit*, S. 286.

(32) H. Happ, *op. cit*, S. 288.

(33) Simplicius, *op. cit*, p. 226. T. Aquinas, *op. cit*, p. 59. cf. R. M. Mcinerny, *The Logic of Analogy, An interpretation of St Thomas;* Hague, (1960) 1971, pp. 141-144. C. Bäumker, *op. cit*, S. 256. A. Mansion, *op. cit*, p. 74. J. Owens, The Aristotelian Argument for the material Principle of Bodies; in *N. A. T.* p. 193. 岩田靖男,「アリストテレスにおける自然(中)」哲学雑誌, 90巻, 792号, 1975 p. 150ff.

(34) W. チャールトンは第一質料説が拠って立つ主要箇所を取りあげ, それを反論している. それに対し H. M. ロビンソンは, 四元素の一つに現実化される可能態としての第一質料の存在をアリストテレスが信じていたと論じている. W. Charlton, *Aristotle's Physics Book I & Book II*; Oxford, 1970, Appendix, pp. 129-145. H. M. Robinson, Prime Matter in Aristotle; *Phronesis* 19, 1974. pp. 168-188.

(35) W. Wieland, *op. cit*, S. 134, Anm. 23

(36) I. Düring. *op. cit*, S. 230.

(37) 「第一の *πρῶτον*」(192a31) とはチャールトンが指摘しているように

"proximate 最近の" を意味している. W. Charlton, *op. cit*, p. 83.

(38) チャールトンは近接性に関し次のように述べている.「木材は寝台がそこから生成する近接的な事物である. たとえいかなる不確実さが人間や犬のような明白な事物を取り囲んでいようとも, 第一質料はそれらがそこから生成する近接的なものではない」. W. Charlton, *op. cit*, p. 79.

(39) F. Solmsen. *op. cit*, p.123, n. 18.

(40) アリストテレスがプラトンの場(コーラー)を質料と同一視する事実には, 多くの批判がある. cf. F. Solmsen, *op. cit*, p. 122, n. 4.

(41) C. Bäumker, *op. cit*, S. 216.